詩文雜誌

星座圖

第一卷・第六號

十二月號

• 野村吉哉……馬賊の息子
• 阿部貞夫……戀と嫉妬
• 一戸玲太郎……戀と云ふものは
• 月原橙一郎……菊の花
• 北山六智夫……小鳥屋
• 大澤重夫……原埜の一樹
• 對馬幹夫……鴨獵
• 櫻庭芳露……詩集「夜の花」を見る
• 增田芳雄……日照り
• 棟方志功……表紙・木版

馬賊の息子

野村吉哉

そのころ私は滿洲長春の郊外に住んで居た。

夏になると、丈餘に伸びた高粱林の間をくぐつて、支那の子供達と鬼ごつこをしたり隱れんぼうをして遊んだ。

高粱林を横ぎつて、白い路がどこまでも續いてゐた。

蒲鉾形の馬車に全財產を積んだ旅人の群が、幾組も幾組も通つて行つた。蒙古の方から砂漠を横ぎつてやつて來たらしい駱駝の一行には、永い單調な旅行の疲れが見えた。又、赤い模樣のある三角旗を先頭に、多くの從者を從へ、奥地の王族の旅行かとも思はれるきらびやかな一團もあつた。

或日、私はいつものように支那の子供達と高粱林の中で遊んでゐた。

私達のなかに、背ばかりひよろ長くて、少し低腦の支那の子供が一人居た。

「コレタベルウマイウマイ」

と言つて、私達が路上に落ちてゐる馬の糞を食べる眞似をすると、彼は私達に從つて本統に馬糞を口に入れたりした。

「ウマクナイ、ウマクナイ」

と言つて彼はペツペツと吐き出して苦い顏をした。

「コレタベラレヌモノウマニナルヨロシイ」

と言つて私達は彼を四つ這ひにさせ、その背にまたがつて高粱林を驅け廻つた。

「ウマニナルダメアル、イタイ、イタイ」

彼はさう言つて小石に掌や膝を傷け、ぴつこをひいて歩いた。その格構が滑稽であると言つて、彼は私達の暍

栄の的にならねばならなかつた。

——突然高粱林の彼方で銃聲が鳴り響いた。一發！　又一發！　白煙が立上る方を見ると、通りかゝつてゐた旅人の一行も銃を構えて應戰してゐる。言はずと知れた馬賊の襲撃である。

あたりは忽ち修羅の巷と化した。

私達は息を呑んで高粱林の蔭にふるへてゐた。

しばらくして旅人側に倒れる者が續出して、生き殘つた二三人は白い路を一散に逃げ出した。

馬賊達は、私達が小さくなつて隱れてゐる高粱休の前を引揚げて行くのであつたが、その時、私達の内の一人がウアウアとか何とか支那語で叫んで飛出した。

私達がハッと思つて立ちすくんだ刹那、馬賊の一人がひらりと馬から降りて、笑ひながらその子供にペチャクチャ言ふと、ポケットからビスケットを掴み出して子供の掌にのせた。そして再び馬に飛び乘つて馳け去つて行くのであつた。

子供は走り去つて行く馬賊の背に、手を振つて何か叫んでゐたが、やがて私達を振り返つて得意さうに言ふのだつた。

「ワタクシチチアリマス」

私達は吃驚した。それが、背ばかりヒョロ長くても少し低腦だと云ふので、今まで私達の輕蔑の種になつてゐた彼であつたのは、少し意外な氣がした。

「ナカヨクアソブヨロシイイヒマシタ」

そして彼はみんなにビスケットを分けてくれた。

その時から、彼は一躍して私達の尊敬の的となつた。

戀と嫉妬

阿部貞夫

——黒衣の女道化師の舞踏に合せて歌ふ——

「汝の濁れる血は流れ出でゝ　洞窟に燃ゆる青き魔火と聖壇に燃ゆる赤き聖火とを消すと云ふ。

罪深きイヴの同族　汝　女の唇よ——
永遠に開く事無く　物云ふ事勿れ。」

私の畫室の隅にある赤い時計が　パブロ・ピカソの螺旋仕掛けで
西暦 1928 年の一番終りの時刻を報じると
酒盃の背後から　戀と嫉妬の黒猫が首を出す

「噫　神様
苦い一杯の酒盃の中に
尊いあなたの血の一滴をお流し下さいまし」

青い酒盃の抒情詩よ
青い冷い月光よ
黒い着物の女道化師よ

私はお前の茶色の髪の毛を刻んで煙管に詰める

細い紫の煙りの中には酸味お前の匂ひが漂ふ

せめて
戀は路傍の一輪の花——
光線を包圍する幕●
姦淫したサンタ・マリヤ●●
犯罪の假面●●●

噫　私の畫囚——
支那産の木靴と
古びたビオロンの先端と
道化た赤色假面と
ラヂオの眞空管と
氣の抜けたオルガンと
聖書の一番小さい活字と

一杯の酒盃の底に映つた影像の畫囚が
ボードレールや谷崎潤一郎には　戀人の唇に見え
ムンクの瞳には　死の影と變じ
美女サロメには　井戸の中のヨカナーン——　銀の皿に盛つたヨカナーンの首に見える

私の畫室の隅にある赤い時計は　パブロ・ピカソの螺旋仕掛けで

西暦 1928 年の一番終りの時刻を報じると
酒盃の背後から　戀と嫉妬の黑猫が首を出す

「マリヤ様●●
尊い私のお母さん　マリヤ様——

あの井戸を塞いで下さいまし
黑い惡魔が　流れの底から上つて來ない樣に——」

不可思議な魔術師の酒盃よ●
骨牌を切る黑い着物の女道化師よ●●
蜥蜴色の女よ●●●

おゝ黑猫や——
お前は　もう　彼處へ行つてお出で
暖爐の陰へ行つてお出で
そして焰の中で燃えておしまひ
蛇の舌になつておしまひ

銀色のマリヤ讃歌●●●
西暦 1929年 ——私の青年はやつて來る

戀と云ふものは

――イヴアン・ゴルに倣つて――

一戸玲太郎

貝がらのやうに閉ぢてゐたおれを、
シャボン泡をもつていつぱいにしてくれたとは、
それほど感謝されないことである。

おまへの身体は牧場であらうと、
昨日も想うて見たそして明日も忘れはしまひ。
おれは指先きでガラス窓を朝から拭いてゐるのだ。
空にはアカシヤが死んでゐて、
おれは時計のなかで十姉妹のやうに啼く。

何故おまへの瞳に火事があつたのか。
何故おまへの匂は八月をひらかせたのか。
何故おまへの足は大地を燠となしたのか。

暦は一枚一枚と落葉となつてゆく。
そしておまへは鳩のやうに飛びさつて、
再びおれの腕には返らない。

おれはとうとう分銅のやうに井戸に落ちてゆく。

ああ　おれは鹿の毛のやうな寢臺をつくらう。
何時かはおまへも凋れた風船のやうにそこに落下してくるだらう。
そしておれはおまへの足の裏をくすぐるだらう。

その時おれは薔薇を室いつぱいに花ひらかせる。
おれはおまへのために腕椅子となる。
おれは本となるランプとなゞ珈琲となる。

菊の花

月原橙一郎

時雨が通つたあとの
庭へ下りて
露を振り振り
菊の枝を折つてゐる、
子供の勳章の様に
赤い小さな花だ。

机の上に挿して

ひとりで眺めてゐる。
酒を呑まなくなつてから
草や花が一層親しいものになつた、
酒場の女や、花街の女を
思ひ出さないではないが、
何だかむかしの話の様な氣がする
貧乏の暗さなども
そんなに迫つて來ない。

菊の花の前で
靜かに坐つてゐるのは
卑怯な事であろうか

だがせめて
菊の花の咲いてゐる間は
こうして坐つてゐたい
むつかしい本や理屈は
誰かにあづけて失つて。

菊の花は
脈搏をおだやかにする。

小鳥屋

北山六智夫

春の街角に立つた
小鳥屋でございます
紅雀　30セン
せきせいいんこう　28セン
ひわ　20セン
十姉妹　35セン
（巣引請合です）

ぐるりの人々におぢけてゐるのか
あまり小鳥ははしやがないが、そのさへづりも何となくやはらかで
とんとん飛ぶごとにちらつく羽には
春の光りが美しくいろどられてゐる

——何方もお買がないんですか
藁のやうな老人だが
小鳥屋のをぢさんは元氣がいい
パイプをかたくくわへて
どつこいしよと生活をかづいて立つた
くんくんパイプをのばる烟は、春の雲となり空へと消えて……
——をぢさんこれからどつちへ。

原野の一樹

大澤重夫

大空の深淵を割つて
大理石のやうに山が光つてゐる
この雪の原野に
枝を張りかざして默然と立つ樹木
如何にその風貌の大らかな平凡さ。

谷や丘や山の續く地平の一点に
何の不思議もなくどつしりと立つて
大空を呼び集めるその枝々
地と空の心靈の發現する處
彼の休格は鋼鐵のやうな地の意志だ。

世界に彼として唯一なる樹木の下に
今日自分の立つて皮を撫る神秘よ
雪野に照り渡る陽は
枝々に明るい微笑を投げ
一本の生に宇宙は合体を歌つてゐる。

鴨獵

對馬幹夫

十一月の朝明けの湖水は、
珈琲皿のやうに青くて冷たい。

弟よ、お前は見たか、
水盤の青に畫く白銀の水浴みの跡を。

そしてお前は訊いたであらう、
あの錆色の危しい鴨の啼聲を。

松林の綠に隱れ枯草の堤防を這ふのも、
弟よ、銃丸のやうな目的があるからだ。

ああ　今こそ私達は射たう、
この銃丸(フレット)となつて彈む心の引金を押へて。

そこで今夜もまたお前の料理だ、
弟よ、鴨汁の甘味で爽やかな舌觀を鳴らさう。

詩集『夜の花』を見る

櫻庭芳露

開巻第一番の「螢」を見る

螢

夏、
微風が吹く、
蛙が鳴く、
夜の精螢が飛ぶ、
ああ、繻子の夜を
金の絲で縫ふ螢、
沈默の文字。
ああ、宇宙の精靈、
神祕の象徴、
ああ、螢よ、
私は飛ぶ、
神祕の殿堂へ、
お前に導かれて。

最初の一行、次の一行、一行一行とまことに平明である。かくも平明に自分の道をコツ〳〵と歩んで行く事に誇を持つてゐるこの詩人を私は思はずにはゐられない。實直な須々田龍介氏の人を思ふ。神祕を逐うて自分を忘れてゐる人の熒々としてかゞやくまなざし、一切の惱をそこに燃燒させて、その時にこそ彼は彼らしく生きてゐるのである。こゝに私は敢て記したい、彼は彼の精靈と共に、彼の精靈は彼と共に生きてゐると。

この詩集に收められたどの詩もどの詩も前述のやうな境地に到らんとして作られたものであるとは、今にして私の見る實にあざやかな實に太い線である。しかし、故意にそれを試みるためにはこの詩人は餘りにも抒情的な詩人である。それ故にこそかくも簡潔な、かくも平明な詩のうちに深い思想と、強い情熱と、太いハーモニーと、高い句をかくも豊に表現し得てゐるのであると私は思ふ。

見よ、「薔薇」を。見よ、「芭蕉」を。「泉」を。そして「孤獨の池」を、「蠅」を。見た所、色彩のない素描に過ぎないやうではあるが……、最も多彩的なと思はれる「思慕」に於いてすら、その色彩はより多く内に籠つてゐるのを私はこの詩人のために喜ぶものである。

「秘密」、「白熱せる稻妻」、表現の確さはよく感覺の鋭さを物凄いまでに語つてゐる。ひるがへつてこれらの詩のうちに平凡な人生の中の非凡を、非凡な中の平凡を見る。そしてまたこの二篇を通してキビ〳〵したこの詩人の生活を見る。

「ベエトウヴエン」と「ストリンドベエリイ」、そして「聲と影」と「科學者」。この四篇の中の前二篇によつてこの詩人は如何にこの二大藝術家にあこがれてゐるかといふ事を、推しひろめていへば如何に藝術家は藝術家にあこがれてゐるかといふ事を、そして後二篇によつてこの詩人は如何に哲學的に美を究めんとしてゐるかを窺知する事が出來る。

詩は作者の生命の表現を直截にする、端的にする、よしそれは如何なる樣式のものにせよ、また如何なる材料のものにせよ、われ〳〵にまで他の形式の文學よりも、より鋭く迫つて來る、それ故にこそ他の形式の文學よりも高き位置にあると、それは詩學のアルファでありオメガアであるが、私はこの「夜の花」一卷はそれを具象化してゐるのを思ひ、この詩集を愛誦した事を喜び、今後もまた愛誦したいと思ふ。須々田氏はそのうちに第二、第三詩集とぐん〳〵伸びて行くであらう。ゆつくりした氣持でそれを待つてよい。須々田氏は必ずや第一詩集「夜の花」にもましたよい詩集を近い將來に出してくれるであらうから。

民謠

日照り

増田芳雄

日照り續けやる
石原焦げる
田甫畑は
赤枯れ
木枯れ

日照り續けやる
井戸水枯れる
血汗　冷汗
汗まで枯れる
とても氣が氣ちや
ゐられない

田甫赤枯れ
俺ら身も乾枯れ

後記

又・金がないので十一月を休んでしまつた。口惜いがどうしようもない。

次號の一月は「青森縣詩人號」として編むことにした・諸彦の御健筆を期待してゐる。

（北山無智）

十二月・遊星抄

・棟方志功氏　帝展に「雜園」初入選

・下山木鉢郎氏　工藤繁造氏と去月十六、七、八の三日間弘前物産陳列館で作品展開催盛會を極めた。

・青旗青太郎氏　東京市外高田町雜司ヶ谷一〇〇〇番に移る。

・久世耿氏　千葉縣松戸在和名ヶ谷本法寺の假寓を引き拂つて去月十二日渡道。

・野村吉哉氏　東京市外澁谷町神泉二四常盤舘に移る。

・一戸玲太郎氏　弘前に「唄社」創む、佐々繁、庄司初郎等を同人とす。

編輯兼發行人　青森縣南津輕郡野澤村增澤五〇一〇　對馬幹夫
青森市寺町七四
印刷人　高谷繁太郎
青森市寺町七四
印刷所　青森印刷株式會社
發行所　青森縣南津輕郡野澤村　星座圖社

昭和三年十二月一日印刷納本
昭和三年十二月五日發行
第一卷・第六號

10sen